
風の吹く日

翠明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風の吹く日

【Nコード】

N8470C

【作者名】

翠明

【あらすじ】

九頭竜によって全てが創造されたとされる世界『カオルーン』。
水の竜脈の守護者・水竜鱗主イル・サライブに仕える風の有鱗ミリイは、数代前の鱗主が風竜鱗主より贈られたという伝説の剣、エアーズブレードの調査を命じられ、彼の剣の眠る遺跡へと赴くのだが……RPG風味なんちゃってファンタジー。BL濃度は薄め、ストーリー性重視で進めております。

邂逅編 01

枯葉のような薄黄色の髪と、淡い青の目。

高くもなければ低くもない平均的な身長と、厚くもなければ薄くもない平均的な体格。

容姿は悪くはないものの、群衆に埋没すればすぐに紛れて分からなくなる程度のもので。

ミリイと呼ばれる彼は、ごくごく普通の、何処にでもいそうな青年だった。

——ある一点を除いては。



さらさらと、薄い紗のように煌めくのは流れる水。

天窓から差し込む光は揺らめく水面に反射し、波のように壁面を彩る。

青を基調とした室内の調度と相俟って、ここはまるで水の底。魚の一匹も泳いでいない事がむしろ不思議に感じる程だ。

最もここが真に水の底であれば、ミリイはどうに溺死しているだろう。

水の大陸サラリアに生まれ育った彼であるが、泳ぎは苦手……というかまるで駄目というか、まあそれはともかくとして。

もう何度も足を運んだはずのこの場所に、未だ馴染む事の出来ないのは、そのせいであるのかもしれない。

頭の片隅でそんな事を考えている自身が妙におかしくて、ミリイは心中で苦笑した。

ミリイの目前に座す彼女は、この水の大陸サライアに於ける至高の

存在。

世界を構成する九大元素が一、《水》の竜脈を守護する、創世神？九頭竜の代行者。

世界にただ九人の尊き鱗主が一人、水竜鱗主。

民衆からはそれこそ神のごとき崇拜を受ける彼女の、愛らしい少女めいた双貌が笑みに崩れる。

「どうかしたのかしらミリィ？」

「はい？」

「今、笑ったわ」

いまわらったわ。鱗主の言葉が脳に浸透し、正しい理解に至るまでに要した時間は十数秒。

ざあっと、ミリィの顔面から血が失せた。

「も、申し訳——」

なんという失態。慌てて平伏し、無礼を詫びようとする彼を、鱗主は鷹揚に制する。

「別に謝る必要なんてないわよ。っていうか、むしろいつも笑っていて欲しいわ」

だってあなた、と鱗主は己の柔らかな頬を掴み、下方へと引っ張った。

少女の柔らかな頬はパン生地のように伸び、歪んだ口元が「へ」の字のような形をつくる。

「いつもいつも、こーんな難しい顔ばかりしてるんだもの」

「は……」

どうにも対応のし難い返答を受け、言葉を詰まらせたミリィの薄黄色の頭が曖昧に揺れる。

ミリィが彼女を苦手と感じるのはこうした時だ。

誰もが跪いて敬意を表する至高の地位にありながら、彼女はまるで悪戯好きの小娘だ。

神の代行者である『水竜鱗主』のあまりにも『人間臭い』言動は、ミリィを酷く戸惑わせるばかりだった。

そう、ここはきつと水の底。

卑小なるこの身には理解も及ばない、神秘の住まう場所なのだ。

そう自らに言い聞かせて、ミリィは波打つ精神を鎮める。

部下で遊ぶ事が大好きな（本人に言わせれば、親睦と友愛を深めるためのコミュニケーションであるらしいが）鱗主にこれ以上付き合えば、こちらの心がポツキリ折れる。いやもう本当に。

とりあえず目先の話題を変えてみる。

「と、ところで鱗主。此度の招呼、いかなるご用命でしょうか」

「あら。用が無ければ呼んではいけないの？」

出来ればそうして頂きたい。……なんて正直な本音が言える程、ミリィの神経は太くなかった。

そして正直な本音と真逆の偽りを吐ける、程よくヨゴレた大人にもなりきれていなかった。

「いいえ決してそのようなこっ！？………と、ふあ、ありまひえんが……」

罪悪感が口の滑りを鈍らせたのか。社交辞令という名のタテマエを述べる途中で思い切り舌を噛む。

淡青の瞳に涙を滲ませ、所在なく身を縮ませるミリィを見る鱗主の瞳はそりゃーもう楽しいげにきらきらと輝いていた。

「嫌だもうそんな顔しないで、用事ならちゃんとあるんだからね？と同意を求めるように小首を傾げて鱗主は笑う。

一点の曇りも無い完璧な微笑はまさしく『花のような』と言う形容に相応しい。

だがそれを映すミリィの淡青の瞳は疑念に曇りまくっていた。

用がある、というのは真実だろう。だがその内容は如何なるものか。丁度一週間前の『用事』がミリィの脳裏を過ぎる。

大切な用事があるのすぐに来てと言われ慌てて行ってみれば氣に入りの指輪を失くしたから探して欲しいというだけの話で、指輪発見

後はお茶会という名目の部下いじりに付き合わされ、何故かその席には何かとミリィに難癖をつけてくる嫌味な赤毛の同僚までいたりして、とにかく針のムシロだった。

そんな『用事』が数回数十回と続けば、無条件にヒトを信じる純真なココロも失われていく。

ミリィの湿った視線を受けてなお微塵も崩れぬ愛らしい笑みを浮かべたまま、彼女は告げる。

「ミリィ。貴方にちよっとお使いを頼みたいのよ」

邂逅編 02

午後の陽射しが万物を柔らかく包み込む。

等間隔に並んだ柱は陽光に照らされ、落ちた影は規則正しい横縞となつて回廊を飾る。

大理石の白と柱影の黒。それを交互に踏みながら進む、ミリイの足取りはひたすらに重かった。

『ミリイ。貴方にちよつとお使いを頼みたいのよ』

限りなく軽うい口調で発せられた、けれどもそれは確かに水竜鱗主の勅命。

否と言える筈もなく、深々と頭を下げ承った命は、信頼の証だ。

貴方なら出来ると。

疑いも迷いも無く彼女は信じ、そしてミリイに託したのだ。

喜ぶべき事だろう。

誇りを抱いて良いだろう。

けれどミリイの心に、そんな感情は全く存在しなかった。

ただ伸し掛かる重責を負つてとぼとぼと歩く。

身に余る、出来るはずがない、どうして自分が、――こんなものさえなければ。

そんなことを考えながら歩く先、柱に寄りかかって立つ鮮やかな赤毛が視界に映った。

見慣れたそれにうんざりする。

よりもよつてこんな時に、いやこんな時でなくても積極的に会いたい相手ではない、彼は。

「ようミリイちゃん」

ひよいと片手を挙げて親しげな挨拶を投げて来る彼、アズ。

しかし口調とは裏腹腹に、アズの口の端に浮かぶ笑みには友好の欠

片も無かった。

「……………」

ミリイは無言で歩を進める。

平時でさえきつい、彼の相手をしている余裕など今の自分には無い。痛い位に突き刺さる視線に耐えてアズの横を過ぎようとした時。

ダンッ、と鈍い音が響いて、突然、目の前にそれまでは無かった障害物が出現した。

ミリイを遮る腕、その手首の内側。浮き出る静脈に添って三つの紅い鱗。

ミリイは反射的に顔を上げる。

そこには鱗と同じ色彩を宿したアズの紅瞳があった。

それはまるで火のように熱く、ミリイの心を灼く。

「鱗主の勅命を受けたって？流石は希少な風鱗殿、鱗主の覚えもめでたいようだなによりだな」

ミリイはぎゅっ、と唇を噛んで俯いた。

分かっている。

たいした実力もないくせに、数の少ない風の有鱗であるというそれだけで、分不相応の扱いを受けている事なんて自分自身が一番良く知っている。

紅い鱗、火の有鱗であるアズの気性は燃え盛る炎そのものだ。

自信家で、それに見合うだけの高い能力を持ったアズには我慢がならないのだろう。

実力も伴わない者が、身に宿す鱗の色だけで、鱗主に重用されているという事が。

分かっている、そんな事は誰に言われずとも自分自身が一番良く分かっているから。

（——気にいらないうなら、放っておいてくれれば良いのに。）

ミリイは黙って俯く。

その沈黙をどう受け取ったのか、アズはミリイの頭に手を置き、彼の薄黄色の髪をぐしゃぐしゃと掻き回す。まるで幼い子供にするよ

うな扱いは、ミリィのなけなしの自尊心を押し潰すのに十分だった。「ろくな攻勢法術も使えない、自分の身ひとつ守れないお前が一人で？ 尖塔に着いた瞬間、即、外法に殺られちゃうんじゃないの？」大丈夫かぁ？と、嘲笑を隠しもしない声音が降って来る。

分かっている、彼は事実を述べているだけ。分かっている。

けれどこんな物言いを受けて、それでも笑顔で対応出来るほどミリィの心は広くない。

――限界だった。

ミリィは大きく首を振り、髪を掻き回すアズの手から逃れた。その勢いのままアズから離れ、数歩の距離を取る。

邂逅編 03

炎のような紅瞳を真正面から受け止めるにはそれなりの勇気が必要とした。

身体の震えを悟られぬよう、必死の虚勢で言い返す。

「……自分の身ひとつ守れないなら、最初から危険を回避すれば良いだけだ。……違うか？」

強い口調で言い放つ。

自分にはそれが出来る。決して外法にまみえる事は無いと。

自負ではなく、あくまでも明確な事実としてそう告げる。

アズはふん、と不満げに鼻を鳴らして、鋭い紅瞳を細めた。

「ああ、風の《順風耳》と《千里眼》はお前の得意技だったっけな。なるほど確かに、こそこそと辺りを伺うには便利な能力だ」

こと探査搜索という分野に於いて、風の有鱗の右に出る者は無い。

ミリィの鱗位は^{クラス}単鱗^{ソロ}。能力的に見れば下位の有鱗であるが、彼のた

った一枚の鱗は純粋な白色に彩られていた。

それはフローレスと呼称される最上の^{クラリティ}純度。

特定分野に於いて突出した能力を発揮するフローレスにあって、ミリィは探査能力に秀でた風鱗だった。

ミリィの得意とする法術はふたつ。《順風耳》と《千里眼》。

《順風耳》は聴覚を、《千里眼》は視覚を、それぞれ広域に渡って展開する法術である。

その知覚範囲には個人差があるが、ミリィであれば最大半径5キロ。その空間全ての事象を認識し得るミリィにとって、危険を回避する事などたやすい事だ。

だが風が探査に優れるように、火は九鱗中で最強の攻撃能力を誇る属性であり、その紅い鱗の保有者は炎さながらの猛々しい性質を持つ者が多い。

戦う前から尻尾を巻いて逃げる、そうした行為に激しい憤りを示す

アズの目に、ミリィは唾棄すべき臆病者とし映っていないのだらう。

——ああ、本当に。

気に食わないなら放っておいてくれれば良いのに。

そんな願いも空しく、聞こえてくるのは床面を打つ靴音。

近づいてきた、人の形をした影がミリィの反面を覆った。

縮まったアズとの距離が息苦しい。

「俺はてつきり、お前が『怖いよ怖いよ』ってガタガタ震えてるんじゃないかと思ってたぜ？……泣いて頼むんなら、一緒に行ってやっても良いと考えてたんだが」

冗談にしては笑えない。

そう思っているのに、表情に浮かぶのは何故だか笑顔だった。

——きつと、とてもみにくい顔で笑っている。

「……余計なお世話だ」

ミリィはそう短く言い捨てると、アズに背を向け足早に歩き出す。これ以上、彼と対峙してはいたくなかった。

一秒でも早くここから去りたかった。

自室に帰るにはむしろ遠回りになる、曲がる必要の無い角を曲がったのは、背に突き刺さるアズの紅い瞳から逃れたかったから。

身体を直角に回転させ、回廊から分かれた細い通路に進む。

回廊を照らす陽光もここまでは届かない。薄い影の中でほうと一息つくミリィの耳に、鋭い舌打ちの音が飛び込んできた。

反射的に耳を塞ぐ。目を閉じる。それでもミリィには《見え》た。

一人回廊に残ったアズがちっと舌を打ち、苛立たしげに柱を蹴り飛ばす、その様を。

《順風耳》や《千里眼》といった法術を発動させている訳では無い。ただ数十歩程度の近距離であれば、たとえ視覚の外にある事でも、ミリィにはそれが分かるのだ。実際に目にするのと同じように。

——知りたくもない事まで。

だからミリィは嫌いだった。

服の布地越し、脇腹にそつと手を遣る。

其処には、只人にはありえないモノ、神の力のひとしずくが宿っている。

九頭竜の恩寵とされる、けれどミリィにとっては重い枷でしかない、白い白い鱗が。

邂逅編 04

昔語りの中、それはエアーズブレードと呼ばれる剣に纏わる物語。



むかしむかし。

風の鱗主様には世界の誰よりも何よりも大切な、愛しい愛しい恋人
がおりました。

ですが彼は外法との戦いで死んでしまいました。

髪のひとつさえ風竜鱗主の元には残りませんでした。

外法の吐き出した炎が、彼という存在の全てをこの世から消してしまったからです。

風竜鱗主は恋人の死を受け入れられませんでした。

死体が無い、だから彼は生きている。

そう言って風竜鱗主は恋人を探し続けました。

誰のどんな言葉にも耳を貸さず、ただひたすらに恋人を探し続けた。

風の大陸のどこを探しても、恋人はみつかりませんでした。

風の大陸にいないならば、彼はきつと他の大陸にいる。

世界のどこかに必ずいる。

そうやって風竜鱗主は恋人を探し続けました。

恋人を探すために竜脈を捻じ曲げて、世界の秩序を捻じ曲げて、そうして自分の心も捻じ曲げて、風竜鱗主は狂って死にました。

新たに即位した風竜鱗主は歪んだ竜脈を元に戻そうと必死になって頑張りました。

けれど水の竜脈は歪みがひどく、簡単には直せそうにありません。

せん。

そこで風竜鱗主は水竜鱗主に一振りの剣を渡して言いました。

『これは剣であり風である。この剣が我が依代となり、正しく風を導くだろう』

エアーズブレードと銘打たれたその剣は風竜鱗主の言葉の通り、水の大陸を流れる風の道しるべとなり、竜脈の歪みを正す要となったのです。

風の結晶エアーズブレード。

その美しい宝剣はその役目を終え、今は水の大陸で一番高い塔の天辺で、静かに眠っているのです。



どこからか、パンの焼ける匂いがした。

鼻孔を刺激するその匂いに、目的地であるゼンノ尖塔に最も近い町、ロブロイはもうすぐそこだと実感する。

最後にもう一度、ミリィは《千里眼》を発動させて周囲を探る。

広がるのは視界、そして五感のどれにも当てはまらないもうひとつの感覚。

知覚範囲の何処にも外法——世界の理に背き異形と化した化物に特有の、歪んだ気配はない。それを確認してようやくミリィは肩の力を抜いた。

何度も何度も繰り返した行った法術探査。「この近辺に外法はいない」、それがミリィの結論だが、しかし用心に越した事はない。

同僚である火の有鱗アズに指摘された通り、攻勢法術の不得手なミリィは、外法に対抗する攻撃手段を何一つ持っていないのだ。

だが張り詰めた糸があっけなく切れるように、過度の緊張はかえっ

て心身を損なう。

人の居住地は鱗主の守護下にあり、外法の接近を阻む防護結界に護られている。

これだけ町に近付けば、もう外法の襲撃は無いと判断して良いだろう。

ミリィは大きく息を吸う。

肺に流れ込む、甘く香ばしいパンの匂い。

それはミリィの心に切ない郷愁を呼ぶものだった。

——思いだす。

生まれ育った小さな町。父は町一番のパン職人だった。

幼い頃からずっと、パンを作る父の姿を見て育った。

父の作るパンを食べて満面の笑みを浮かべる人達を見て育った。

いつか父のようになりたいと、古ぼけて足のぐらぐらする踏み台に上って、父の横に並んで粉だらけになりながらパン生地を捏ねた。

「立派な跡取りがいて羨ましい」と、そう言われる度、照れ臭そうにけれど誇らしげに笑う父の笑顔をミリィは今でも覚えている。

成長して、父のようなパン職人になって、父の跡を継いで、恋をして結婚して家族を持って、そしてまた子供と一緒にパンを焼いて。

人生が終わるまで、あたりまえのように続くと信じていた日常は、ある日突然に終わりを告げた。

十七の夏、ミリィの脇腹に現出した、たった一枚の白い鱗によって

邂逅編 05

世界を構成する九つの元素を宿す神の欠片、それは竜の鱗という形を成して人に宿る。

その力の源、竜鱗の現出条件は全く解明されていない。

生まれつきの者もいれば、ミリィのように後天的に現出する者もある。

年齢。

性別。

環境。

血統。

考え得るありとあらゆる要因を並べてもそこに共通項は何一つ無く神より授かりし能力を世のため人のため役立てよう、等という粉骨碎身滅私奉公な精神など持たぬ者であっても竜鱗は現出する。

過去を振り返ってみれば、己の欲望に屈し、その能力を悪用して外道に走った有鱗は掃いて捨てる程存在する。

気まぐれのように与えられる、神の奇跡。

その謎を解き明かす、数多の研究者がこの命題に挑み、そして敗れた。

卑小なる人の子には到達し得ない深淵を知るのみに終わった。

それでも尚真理を求め、人為的な有鱗の作出を企てた鱗主も存在したが、その結末は無惨なものだった。

そして現在に至るまで、竜鱗の現出条件は全く解明されていない。

それはある意味で当然の事であるのかもしれない。

人の理解を、能力を超えた、それこそが神秘であるのだから。

竜鱗を宿した者、有鱗は外法に対抗する超常の能力を持ち合わせて

はいるが、決して戦闘を強要されている訳ではない。

彼等のごく普通に、一般の民のように市井で生きていく事を赦されている。

竜鱗の現出後は一定期間を修練府で過ごし、能力の制御を覚える事を義務付けられるが、それさえ終えれば後は自由だ。

その後の生をどう生きようと、それは個人の意思として尊重されている。

だが有鱗の在り方はあまりに只人と違いすぎた。

ヒトを超越した能力——法術を自在に駆使し、寿命も数倍、老化も非常に緩やかなものになる。

能力の高い者に至っては成長そのものを止め、数十年と変わらぬ姿を保っている。

また、未だ確定はされていないが、有鱗は生殖能力を持たないとされている。実際に有鱗が子を成したという記録が皆無である為だ。

ヒトと違う能力を持ち、ヒトと違う時間を生きる。自らの血を遺すこともできない。

与えられた自由は、異端を痛感するだけだ。

故にごく僅かな例外を除き、有鱗のほとんどは鱗主に仕え、世界を守護する戦いに身を投じる事を選択する。

……勿論そこには鱗主に対する敬愛の念、同胞たる人を守りたいと願う純粹な心が存在するのだろうが。

ミリィにはそんな大それた信念も覚悟も無かった。大多数の有鱗と同じ道を選んだのは、ただ、一人になるのが怖かったからに過ぎない。

修練府を出てすぐに仕官試験を受け、そのまま水竜殿に上がってもう十年以上が過ぎる。

その間、ミリィは一度も故郷に帰っていなかった。

かつてあたりまえのように共有していた平凡で穏やかな時間。

そこから逸脱し、異分子となった自分を自覚するのが恐ろしかった。目頭にじわりと込み上げてくる熱いものを無理やりに抑え込む。感

傷を振り切るようにミリィは歩調を早めた。

町へと続く整備された街道から外れ、木々の乱立する林の中へと進んでいく。

無論そこに舗装された道などあるはずもない。

だが緑の草と落葉に覆われた林の土を踏む、ミリィの足取りには何の迷いも無い。

《千里眼》によって得た地理はすでに頭に入っている。多少の勾配はあるものの、ロブロイへ行くならばこちらの方が早い。

ミリィの靴に潰された草からは抗議のように青い匂いが上り、鼻孔に残る甘いパンの香りを塗り替えていった。

わさわさと草木を掻き分け、丁度頭の高さに伸びた枝を払ったその先に。

——まるで一幅の絵のような光景を見た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8470c/>

風の吹く日

2010年10月22日11時04分発行